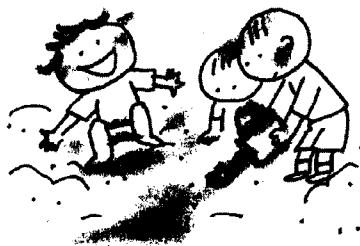


## 子ども文化の詩学 (6)

# 遊びつくすこと

森下みさ子



### ◆子どもにとっての「遊ぶ」

「子どもにとって遊びは大切だ」と誰もが言う。もちろん、大人にとっても遊びは大切であるに違いない。が、大切さの程度や意味は異なっている。遊べない子どもは気になるが、大人が上手に

遊べなくても、程よく休息をとって仕事や日常生活をこなしていれば、さほど問題にすることはない。つまり、子どもにとって遊びはヒトとして育っていくうえで必要不可欠なことだが、人間社会に位置づいた大人にとっては息抜きという意味において大切なのである。当然、遊びの中身や遊

び方も異なる。

学生たちに「今の遊び」と「子どものころの遊び」を挙げてもらうと、大人になった今はカラオケやショットピング、ケータイやファミレスでのおしゃべりなどが挙がってくるのに対して、子どものころの遊びといえば、かくれんぼ・鬼ごっこ・ままごと・〇〇ごっこ・積み木・どろんこ遊びなどである。ゲームも挙がってくるが、子ども時代のみならず、今もお遊んでいる場合が多い。対して、どろんこ遊びなどは、どろんこ祭りのような特別な場合を除けば、大人だけでどろんこ遊びをする人はいないだろう。むしろ、大人にとって「どろんこ」は避けたい嫌な状態に違いない。

しかし、幼児期の子どもたちにとっては本当に楽しい遊びである。型を抜いたり、泥団子を作ったり、山や川やトンネルを作っては壊して延々と遊んでいる。特に活気が満ちるのが、砂に水を混

ぜて、まさしく「どろんこ」状態になった時だ。

次々と水場からバケツやジョウロで運ばれてくる水によって砂場は一変する。水を吸い込んだ砂は黒く重たくなってまといついてくる。何かを作るには柔らかすぎる泥と化した砂場は、ただもう入り込んで、滑り込んで、泥だらけになって笑い合う場所となる。子どもたちの言葉にならない声の響きを聴いていると、どれだけ心が解き放たれているかわかる気がする。

小さい子どもたちの説明（連載第一回（本年二月号）で紹介した絵本『あなほほるもの おっこちるとこーちいちゃいこどもたちのせつめい』）によると「どろんこは、とびこんで、すべりこんで、おっこりんのしゃんしゃんつてするところ」なのだそうだ。この答えに、絵本作家であるセンダックは、首まで泥につかった子どもや、頭から足先まで泥まみれになった子どもを描いて応

えだが、まさしくどろんこ遊びの魅力は、心の芯までずっぽりと泥に入り込んで、泥と一体化することにあるだろう。泥と一体化する、このことが子どもを引き寄せ解き放ち、同時に、大人に嫌がられる根本原因となっている。とすれば、泥と一体化するどろんこ遊びの力とは何だろうか。

### ◆どろんこの力

どろんこ遊びがもたらす力を考えるにあたって、まずは私たち大人がなぜどろんこを嫌がるのか、改めて考えてみたい。何か特別な状況（お祭り、保育など）でもない限り、大人は泥が苦手である。できることなら触りたくないし、服にでもつけられたらとても困る。なぜだろうか？ たとえば、それが水だったら？ さらさらの砂だったら？ あるいは固い土だったら？ 泥ほど嫌ではないに違いない。乾かしたり、払いのけたり、た

たいたりして取り除けるからだ。

泥が何より困るのは「くっついてとれない」うえに「さらにほかの部分にくっつく」からではないだろうか。まるで生命をもっているかのよう  
に、泥は「私」を侵食してくる。形の定まらないべったりしたものがくっついた途端、きちんとした服に包まれた「私」という個体の輪郭線が崩れ、「私」でいられないような不安定な状態を生み出してしまふ。

一方で、「私」の輪郭線を脅かす力や容易に他者とくっついてしまふ力とは、それだけ生き生きとした生命力や他者との一体感に結びつくものともいえるだろう。小さい子どもたちがどろんこ遊びの中で「感じとっている」のは、まさにこの大人の嫌悪感と表裏一体の生命力であり一体感であると思われる。大人が「秩序・分化・分類<sup>律</sup>」を価値として世界と向き合うのに対して、子どもは

「混沌・融即・共存<sup>註2</sup>」の面から世界に入り込んでいくといってもよいだろう。形を成さずにくっついては子どもたちをつなげてしまう泥の力は、原始的で根源的な体験をもたらすのだ。

前回（本年十月号）、おもちゃを使った遊びにおいて、自己とヒトとモノとが密にかかわることによって作られる「おもちゃの三角形」について考えてみたが、どろんこはこの関係をよりいっそう強めるものではないだろうか。何といっても泥には互いをくっつけてつなげてしまう力が備わっているからだ。最初は泥の中に入ることを持ちゅうちよしていた子どもも、いったん泥をつけられたり、つけたりしているうちに、泥が作り成す世界に入り込んで、それこそ「おっころりんのしゃんしゃん」としかいいようのない感覚を味わいつくす。むしろ、どうしても泥をいじれなかったり、どろんこの中に入れなかったりする子どもに対し

て、私たちは何か大切なものを忘れてきたかのような不安感すら覚える。

どろんこ遊びには、単なる健やかに遊ぶ子どものイメージのみならず、私たちが身体の奥底に刻みつけている貴重な体験の記憶が在るに違いない。自ら湧き出てくるエネルギーと他者のそれとがかかわって響きあう、その共鳴感こそが私たちの根っこでつながり、生命を支え合っているのではないだろうか。

#### ◆遊びの体験から

どろんこ遊びには臨界期がある。就学後ともなるとなかなか泥だらけになって遊ぶことはできない。子ども自身がどろんこに興味を失う場合も、大人が泥を使った遊びに、にわかに不寛容になることも含めて、どろんこ遊びの特権は幼児にのみ与えられているといえる。もちろん、どろんこ遊

びに限ったことではないが、幼児の一時期、子どもを魅了し、大人たちも記憶を介して積極的に是認する遊びには共通して、かかわり合うことによつて生命を感じ合い、支え合うという意味が潜在している。それは、決して文字で覚えたり頭で理解したりするようなことではない。身をもつて感じとつていくものである。

子どもにかかわるさまざまな事件が取りざたされる昨今、しきりに「生命の大切さを教える」ことが課題として挙げられる。小学生が被害者になるだけでなく、時には加害者になることもあり得る現在の状況を見ると、先生方がまなじりを決して「生命の大切さ」を教えようとするのもうなずける。しかし、標語のように言葉にして繰り返して唱えても、そのことの真意を心の底から得心することは難しいのではないだろうか。

いったい生命を大切にするとはどういうことな

のか。それに応えるためには、言葉や文字を介して教わるより以前に、自らの生命が大切にされていること、そのうえで他者の生命とつながり「気持ちよい」という共生感覚に浸ることが必要と思われる。すなわち、自他両方の生命を感じとることが求められるのだ。

理屈より手前で「感じとる」ことができるのが「幼児期」であり、その機会は「遊び」の中にこそある。どろんこ遊びの体験は、まさしく身をもつて生命を感じとる、いつときの体験であり、だからこそ、小さな子どもの遊びとして見守られてきたのだろう。

#### ◆子ども文化の詩的作用

幼児期に託されている子ども文化の意味は、まだ不安定な幼い生命が人間社会にヒトとしての居場所を見つけ、他者と共に在ることの幸福感を、

身をもって感じとつていくことにある。絵本やおもちやや伝承遊びやお菓子なども含めた子ども遊びすべてが、そのための通路となり、かけがえのない〈場〉となる。その〈場〉で子どもたちが体験していることは、どろんこ遊びに代表されるように、夢中になって遊ぶことで自分とヒトとモノとが「溶け合う」気持ちよさであるだろう。この包まれるような安心感、他者と共にある一体感、そしてヒトとモノとかわり合うことによつて噴出してくる生命の感知、これらがヒトがヒトとして人間社会で生きていく時の基盤となることは間違いない。

しかし、その成果は多くの場合、早急に明確な形となつて現れることはない。言葉の手前、あるいは言葉の誕生期に位置する、多義的で不定形な体験であるからこそ、目に見える効果を析出することはできないだろう。だからこそ、そこには大

人の性急な解釈を拒む重要な意味が潜んでいるといえるのではないだろうか。そのことの意義は、「今ここで」（何かのためではなく）ひたすら遊びつくされる現場において、子どもたちの生き生きした様子から、私たちが「感じとる」しかないのである。私たち大人の身体の感受性の記憶において、子どもたちが感じとつている力と共振し、共鳴すること。意味よりも奥深いところで心を揺り動かす詩的作用にも似た体験が幼児の世界にはあり、また、あり続けることを願わずにはいられない。

（白百合女子大学文学部児童文化学科准教授）

注

- 1・2 本田和子著『子どもたちのいる宇宙』三省堂書店 一九八〇年より引用

\*この連載は今回で終了いたします。